焼却、最終処分まで、全て自社の処理施設で可能とする一貫したトータル処理システムを構築してきた。これまで5期の安定型最終処分場を運営してきたが、管理型は初となる。

木下社長は「管理型最終処分場の建設は、創業以来の念願であった。地域の方々のご理解とご協力に感謝する気持ちを忘れることなく、安心・安全を第一に維持管理を行い、次につなげていきたい。まずは県内の顧客ニーズに応えながら、中部や近畿の受け皿にもなっていく考えだ」と意気込みを語った。

エコロ

所沢の加工能力増強

硬質プラのリサイクル 綾瀬から移設、月間150tに

プラスチックリサイクルなどを手掛けるエコロ（本社・埼玉県富士見市、後藤雅晴社長、☎049・265・8390）はこの度、同社の「所沢マテリアルセンター」（埼玉県三芳町）に硬質プラスチックスクラップの破砕・比重差選別ラインを移設するとともに、破砕機の更新などで加工能力を従来比2倍強の月間約150ﾄﾝに増強した。後藤社長は「来年からのバーゼル法改正施行もあり、プラスチックスクラップや廃プラスチックのリサイクルも変化するだろう。『高く買う』という価格競争ではなく、『排出事業者や廃棄物処理業者が困っているものをリサイクルする』という事業形態にシフトする」と述べている。

今回の所沢マテリアルセンターのリニューアルは、これまで同社の「綾瀬リカバリーセンター」（神奈川県綾瀬市）に設置していた設備を発生量が多い埼玉県内の拠点に移して、事業の合理化を図ったもの。所沢に集めたプラスチックスクラップの運搬に係る手間とコストをなくすとともに、可能な限り機械化・自動化することで従業員の負担を軽減した。

所沢マテリアルセンターでは主に、ポリエチレン（PE）やポリプロピレン（PP）、ポリ塩化ビニル（PVC）の硬質プラスチックスクラップを扱う。新しくなった加工フローは、まず大型のプラスチックスクラップについては今年初頭に導入した大口径破砕機で粗破砕して、PEやPPは破砕機と磁選機、粉砕機、比重差選別機からなるラインでフレーク（粉砕物）に加工する。大口径破砕機や破砕機などについては仏EMMA社製の最新鋭装置を導入している。

フレークについては国内のプラスチック成形加工メーカーに出荷しており、再生ペレットが求められる場合は綾瀬リカバリーセンターの押出機などの設備で加工する。

今回の設備移設で空いた綾瀬リカバリーセンターのスペースには、将来的に塩ビ壁紙のリサイクル設備を増設する考えだ。

破砕・比重差選別ライン

要望に応じてフレーク(左)をペレット(右)に加工